国立大学法人 大阪教育大学
大阪教育大学 附属特別支援学校
附属特別支援学校　小学部教諭　松本　将孝
高度教職開発部門　准教授　庭山　和貴

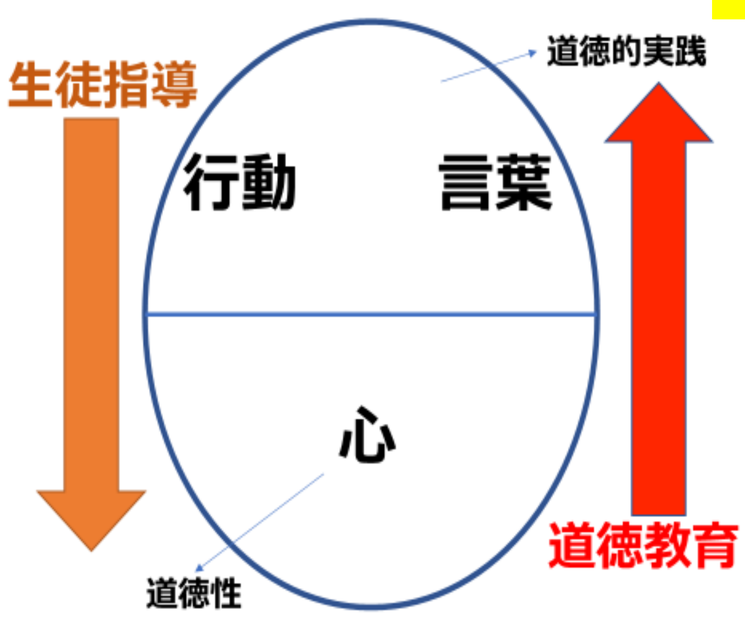
知的障害教育における「特別の教科　道徳」の指導及び評価方法の実践的検討

Keyword：発達段階理論、道徳性と道徳的実践の往還、知的障害教育

背景と目的

学習指導要領改訂に伴い、特別の教科化された「道徳」の指導実践を進めるにあたり、これまでの通常教育における道徳教育及び道徳科の指導を知的障害のある児童に適用しようとするときに生じる困難さや課題について、文献研究から整理を行い、知的障害教育における道徳教育の仮説指導モデルを構築した。そのモデルを適用したアプローチで附属特別支援学校小学部児童に対し道徳科の指導を行い、その学習効果について分析した。

仮説指導モデルについて



通常教育における道徳教育モデル（横山 2015）

知的障害教育に適用させた結果

①発達段階、②道徳性、③社会性、④知的障害教育の基礎を考慮して作成した結果…

知的障害教育における道徳教育の仮説指導モデル（著者案）

実践事例①

テーマ１：「思いやり」（道徳性→道徳的実践）

①授業の主題「仲間外れになった気持ち」

②授業のねらい

なぜ思いやりを持って、友だちに優しく関わったり、親切に関わったりすることが大切なのかを理解し、それを日常生活での行動につなげようとする態度を育てる。（小学校１・２年　B–(9)友情、信頼）

③活用教材「およげない　りすさん」（出典：光村図書「どうとく２」）

④授業の進め方

a.教師による判読（絵本はアニメーションをつけてデジタルで作成）

b.ペープサート劇（登場人物の気持ちの擬似体験）

c.「動物の気持ちはどうだった？」（発問・道徳性）

⑤評価

ペープサート劇によって自分が体験した登場人物の気持ちの理解は可能。一方で、状況から他者の気持ちを推測させる発問には回答状況にばらつきが見られた。「心の理論」の習得や他者視点の獲得の度合いが明確に出た結果であり、知的障害のある児童生徒に対する道徳の授業を進める中で重要な視点となる。

（発問）りすと遊べない
あひる・かめ・はくちょうの気持ちは？

		うれしい	つまらない	こわい
A	12/10		△ (Prompt+)	
	12/17		○	
B	12/10		–	
	12/17		○	
C	12/10		△ (Prompt+)	
	12/17			○
D	12/10		○	
	12/17		○	
E	12/10		△ (Prompt+)	
	12/17			○

実践事例②

テーマ２：「清潔」（道徳性⇆道徳的実践）

①授業の主題「じぶんをまもる、ともだちもまもる」

②授業のねらい

手洗い等の清潔行動をすることによって、自分だけでなく他者の健康を守ることができることに気づき、日常での清潔行動につなげようとする道徳的実践意欲と態度を育てる。（小学校１・２年　A–(3)節度、節制）

③活用教材「あわあわてあらいのうた」（出典：花王ビオレｕハンドソープ）

④授業の進め方

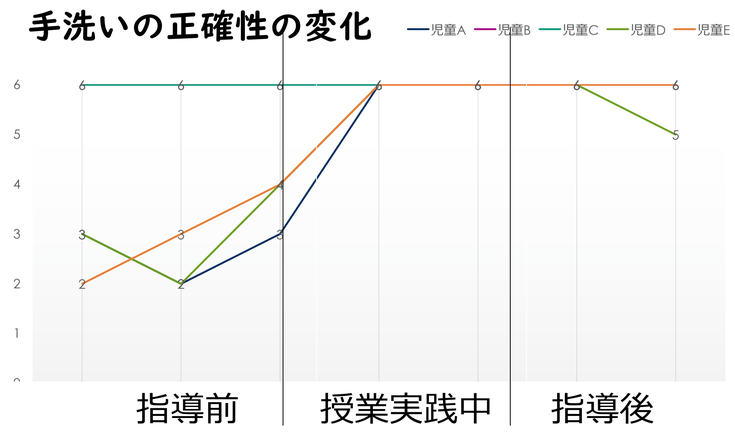
a.「コロナが流行っている中で、もし手洗いをしなかったら？」（発問・道徳性）

b.手洗いの練習（道徳的実践）

c.「手洗いをしたら？」（発問・道徳性）

⑤評価

手洗いの道徳的意義を理解し、教師や友だちに丁寧な手洗いを促す児童もいた。手洗いの正確性も得点として向上した。（あわあわてあらいのうたの６ステップで１ステップができていたら１点、満点で評価）



考察

知的障害教育において、生活年齢の考慮はもちろんのこと、発達段階に応じた指導アプローチの選択が求められる。道徳科における資質・能力を育てる上で、各教科同様アセスメント等を行いデータに基づく指導方法の決定が有効であることが示唆された。子どもの発達段階によっては、道徳的実践を体験的に行うことによる道徳性の向上というアプローチを取り入れてもよいのではないかと考えられる。

※本研究は2020年1月16日付で大阪教育大学倫理委員会で倫理承認（承認番号487）を得て行ったものである。また本学附属学校園職員の内地研修における成果の一端を示したものである。